

## 断りの表現-コミュニケーションと含意-[\*]

野村美穂子

### 1. はじめに

ものを頼まれたり何かに誘われたりしてそれを断る場合、「いやだ」とか「(私は)・・・しない」などと即座に相手に告げることは少ない。まず次の例を見てみる。

- 1) a: あ、それで思い出した。今度父親の会社で「〇〇〇事典」っていう本を出すんだけど、興味ない? ××円が1割引きになるんだけどさ。よかったら買ってくれない?  
b: 「〇〇〇事典」? んー、郷土史の本ねえ。いやあ、いらない。  
c: うわ、身も蓋もない答え! 「いらない」だって。もうちょっと何か言しようがあるでしょ。  
a: いや、でもいいよ。妾に気を持たせられるよりはね。

この1)は親しい友人どうしの間で実際に行われた会話である。aの頼みに対してbが断っており、さらにそのbの断り方について、別の友人cと頼んだ本人であるaがそれぞれ意見を述べている。ここで、cの発言は興味深いものである。確かに、ものを頼まれたり何かに誘われたりしてそれを断ろうとする場合、最終的な自分の意思を伝えるということのみを考えれば、上例のbのように直截的に言えばすむことだが、実際にはそのようにきっぱりと拒絶するのは稀で、cの言うように「もうちょっと何か言しよう」を考えて婉曲に間接的に「断り」の意を伝えることが多い。親しい友人どうしの会話であれば1)の場合のようになんか直截なものの言いをして相手にもそう悪くは受けとられないということも考えられるが、ふつうは、このように直截的な言い方をすれば、「断る」という目的は果たすにしろ、相手との人間関係を危うくするおそれがある。本稿では、Grice(1975)やLeech(1980,1983)などの論を参照しながら、このような断りの表現に関して簡単な考察を試みることにする。

## 2. 断りを含む会話の分析：会話のゴールと断り方の意味

断りの表現を分析するにあたっては、特定の状況を設定してアンケート調査を行ったりすることも考えられるが、ここではそのように場面や会話の相手等を限定した上での数量的な分析を行うことはせず、便宜上日本の現代文学の中から「断り」を含む場面をいくつか選んで考察の材料とすることにする〔注1〕。

- 2) 「もう一度二人きりで会えない？」――私は何かに急かれるように哀願した。「ちっとも疾ましいことじゃない。ただ顔を見さえすれば気がすむんだ。僕にはもう何も言う資格はない。黙っていたっていいんだ。たった三十分でもいいんだ」
- 「会ってどうなさるの。一度お目にかかればもう一度と仰言りはしなくて。主人の家は姑がやかましくて、いちいち出先から時間までしらべることよ。そんな窮屈な思いをしてまでお目にかかっている、もしかして・・・」――彼女は言い淀んだ。「・・・人間の心って、どんな風に動いてゆくか誰にも言えないわ」〔注2〕

例2)の「彼女」と「私」はかつての恋人どうしであるが、今は「彼女」は別の人と結婚している。ある時久しぶりに偶然再会して以来、ときどき会って話すだけの関係が続いているが、「彼女」の方はそのような無意味で危険なつきあいはもうやめようと思い始めている。ここで「彼女」は「もう一度会って欲しい」という「私」の要請に対して「会わない」というはっきりとした拒否のことばは一言も発していない。にもかかわらず、「彼女」の発言は「断り」の目的を達している。この会話を Grice の協調の原理 (cooperative principle) 〔注3〕との関わりで考えてみる。Grice の協調の原理は

会話においてはその場の目的・方法が要求するような発言をすること

ということを大原則として、次のような四つの範疇の原則に細分される。

量の範疇：

- 1・(会話の現在の目的にとって)必要なだけの情報を含む発言をすること
- 2・必要以上の情報を含む発言をしないこと

質の範疇：真実の発言をすること

- 1・偽であると信じていることを言わないこと
  - 2・充分な証拠のないことを言わないこと
- 関与性の範疇：関連のある発言をすること
- 様式の範疇：明瞭であること
- 1・表現の不明瞭さを避けること
  - 2・曖昧さを避けること
  - 3・簡潔であること（不必要な冗長さを避けること）
  - 4・秩序だった発言をすること

この協調の原理に則って考えると「彼女」の発言はいささか適当でないということになる。まず、要請への返事をしておらず、量の範疇の原則に決定的に違反している。「彼女」の発言は、全体的に見ても、表現は明瞭でなく、簡潔とも秩序だっているとも言えないし、言い淀んだ後の発言など、一見関与性の範疇の原則に全く反しているようである。にもかかわらず、会話は立派に成り立っているのであり、ここでは次のようなことが言えると考えられる。

- ①話し手は、文字どおりには a という意味をもつ発言 A を行っている。
- ②話し手が A によって真に伝えようとしているのは、a ではなく b である。
- ③聞き手は b を理解する。

すなわち、「彼女」の発言は協調の原理に違反することによって会話の「含意」を成立させているのである。では、なぜこの話し手はこのようなまわりくどい不明瞭な断り方をするのであろうか。Leech [注4] は発話内行為について次のように述べている。

発話内行為の中には、本質的に無礼なもの（例えば、命令）もあるし、本質的に礼儀にかなうもの（例えば、提供）もある。したがって、消極的な意味での丁寧さとは、無礼な発話内行為の無礼さを最小限にとどめようとするものであり、積極的な意味での丁寧さとは、礼儀にかなった発話内行為の礼儀への適合性を最小限にしようとするものということになる。

この考えを、そのままここに当てはめることができる。つまり「断る」という行為は本質的に無礼なものと考えられるのである。「断る」とは、要請や勧誘などの申し出に対し拒絶の姿勢を示すことである。先行して起こる要請や勧誘などの申し出の話し手はその申し出が受け入れられることを望んでいるわけであるから、拒絶するのは相手の意向に添わないということになり、失礼な行為ということになる。そこで含意をもつ表現を

用いてできるだけそのあからさまな失礼さをあらわにしないよう努めるわけである。

2) を具体的に見ていく。「彼女」はまず「会ってどうなさるの」と言う。要請に対するイエス・ノーの即答を避け、逆に相手の側に質問を投げかけるのである。「彼女」には、その要請を受け入れることが自分にとってはもちろんのこと相手にとっても無意味で何のプラスにもならないということがわかっており、したがって断ろうと思うのだが、相手の方はそこまで考えておらず単に感情でものを言っているだけである。そこでこの質問が発されることになる。「会いません」というだけでは「会って欲しい」という相手の意向を全く無視したも同然だが、「会ってどうなさるの」という質問であれば一応は「会う」という可能性も考えてみるということを示していることになる。それにより一旦相手の意向を受け止めているわけである。答えが欲しくてした質問ではないので、その後も自分でそれを展開し、発言が核心に触れるかというところまでくると、それを言わずに一步引いた一般論で終わらせる。結局「彼女」は、最も言わなくてはならないことは何も言わずに、その周辺だけをいろいろな角度から示してみせているのである。この例における発言と含意の流れを図式化してみたのが図1) である。

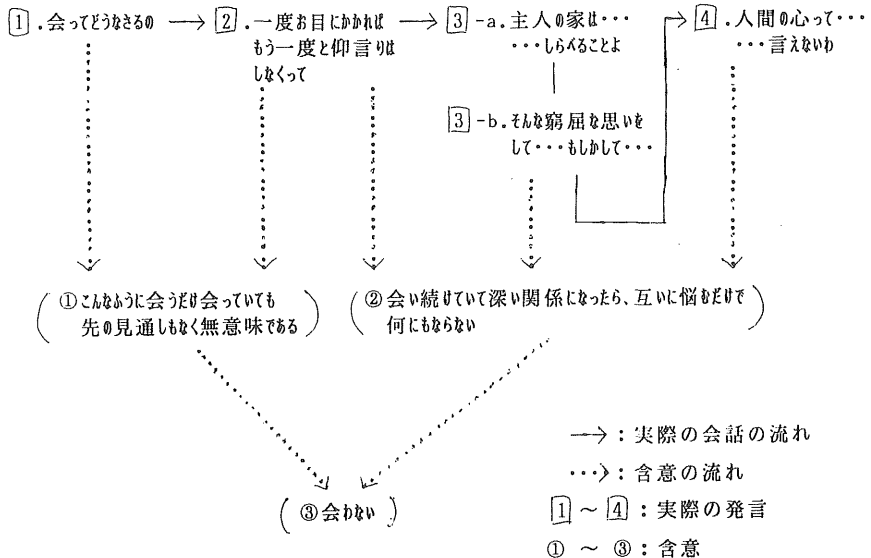


図1) 例2) における話者の発言と含意

さらに例を見してみる。

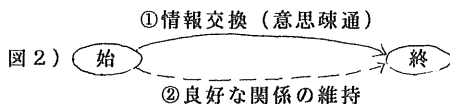
- 3) 二時間の休憩時間ギリギリになるまで、私たちは話をすることにした。彼はベッドのわきにあったイスにすわり、私は、ベッドの端に腰掛けて、足をバタバタさせた。
- 「ねえー。」  
「なあに？」  
彼は、しばらく黙っていたが、  
「電話番号。」  
と、切り出してきた。  
「知らない方が、いいと思うわ。」  
「――。」 [注5]

ここでも、電話番号を教えるよう要請された「私」は、「教えない」と直截に断りはせずに、むしろ相手のために思いやっているような間接的な言い回しで断っている。

例2) や3) に見られるようなまわりくどい言い方をするのは、会話というものが、Grice が協調の原理の前提として掲げたような「共通の目的を目ざし一定の方向に進む話者と聞き手との協同作業」としての面のみをもつものでなく、「情報交換により一定の目的を果たす」というゴールのほかに、もうひとつ

相手との良好な人間関係を維持する

というゴールをもっているからであると考えられる。つまり、Grice が考えたように会話というものを常に何らかの方向をとって話し手と聞き手とが協同して情報を交換しながら終結へと進む行為であると仮定するとき、実はそこにはもうひとつ満たすべき暗黙のゴールがあることがわかるのである。それが「良好な関係の維持」という対人関係面でのゴールであり、したがって会話の進行は次の図2) のように図式化し得る。



通常のニュートラルな状況においては、会話の参加者はこのように常に互いに良好な関係を維持しようとするものであり、情報交換といういわば表のゴール (図2におけるゴ

ール①)の方に関わってくるのが Griceの協調の原理であるとする、 「良好な関係を維持するようにせよ」というこの裏のゴール(図2)におけるゴール②)の方に関わるのが Leechの掲げる丁寧さの原理(politeness principle) [注6]と考えられる。

Leechは、「会話には社会的なゴールと個人的なゴールがある」として前者のゴールに注目し、対人関係という面から以下のように丁寧さの原理を考えた。

丁寧さの原理というものは、その消極的な面においては、次のような一般的な形で定式化することができよう：「(他の条件がすべて同じであるならば)礼儀にかなうとは言えないような信念を表わす表現は最小限に抑えること。」これに対応して、それを積極面において定式化したもの(「(他の条件がすべて同じであれば)礼儀にかなうような信念を表わす表現は最大限にすること」)もあるが、重要性はいくらか劣る。さらに、この原理に属する諸原則が次のようなものである。

(I) 気配りの原則

- (a) 他者に対する負担を最小限にせよ。
- (b) 他者に対する利益を最大限にせよ。

(II) 寛大性の原則

- (a) 自己に対する利益を最小限にせよ。
- (b) 自己に対する負担を最大限にせよ。

(III) 是認の原則

- (a) 他者の非難を最小限にせよ。
- (b) 他者の賞讃を最大限にせよ。

(IV) 謙遜の原則

- (a) 自己の賞讃を最小限にせよ。
- (b) 自己の非難を最大限にせよ。

(V) 合意の原則

- (a) 自己と他者との意見の相違を最小限にせよ。
- (b) 自己と他者との合意を最大限にせよ。

(VI) 共感の原則

- (a) 自己と他者との反感を最小限にせよ。
- (b) 自己と他者との共感を最大限にせよ。

先にも述べたように、「断る」という行為はそもそもが「合意」のあり得ない本質的に失礼な行為である。そのためにこそ、礼を失することの少ないようにする必要性がより大きくなる。例2)で見たように相手の意向を一旦受け止めてみせるのは、上で引用した丁寧さの諸原則のうちの(V)や(VI)のあらわれと考えられる。例3)の場合も、「電話番号なんて教えない」と直截に言う失礼さを避け、相手との意見の不一致を最小

限にしていると言え、やはり丁寧さの原理に則ったものである。ただ、3) の場合には2) の発言と比べると丁寧さの度合いがいくらか低いと言えよう。なぜなら、3) の発言は一見したところでは相手の利益を考慮するという(1)の気配りの原則にかなったものであるが、そこには聞き手の利益に関する話し手のいわば自分勝手な判断が入っており、押しつけがましさが感じられるからである。このように対人関係の面から断りの表現を見ていくと、直截さを避けて懇懇に断ろうとする場合の会話にはある共通点が見出される。それは、2)と3)の例でもわかるように、そういった断りにしばしば何らかの「理由づけ」が行われるということである。2)の場合、話し手である「彼女」が相手の要請を断るのには理由があるわけで、それを述べることによって「断る」行為が正当化されその「手前勝手さ」が削減されるのである。図1)に見られるように、最終的な含意③(断り)を導く①および②は③の理由となっている。3)の理由づけはより明示的である。あまり説得力もなく押しつけがましい理由づけではあるが、それでもこの理由づけをすることにより話し手は「断る」という行為が相手に与える手前勝手さの印象を薄めていると言える。理由づけを明確に押し出して「だから断ってもしかたがない」という態度を見せているかのような3)に比べると、理由までも含意にした2)では婉曲性がさらに強まっており、より「丁寧な」断りとなっていると言えよう。

もうひとつ例を見てみる。

- 4) 「どうだい、書いてくれよ。そういう方法で、レズビアンというものを描くことができる、とおもうんだ。君自身のことを書け、というわけじゃない」  
「そのことは、分った」  
「興味がないか」  
「そういうわけでもないが、しばらく考えさせてくれないか」 [注7]

ここでの断り方はこれまでの例とは少し異なっている。確かに日常生活においてこういう苦しまぎれの断り方をすることは往々にしてあるのだが、この場合明示的には回答を延期しているだけであって、文字どおりに見れば決して断ってはいない。ここでも、相手との意見の相違を最小限にするという合意の原則が働いていると言える。直截的に断らずに相手の意向を一旦受け止めて見せているのである。ただ、この4)は、先の2)や3)とは異なり、「断る」べき理由づけは何もしておらず、先に述べたように形の上では単に回答を先に引きのぼしただけにすぎない。したがって、「含意というものはす

べて蓋然性の度合の問題である」〔注8〕ことを考えればこの発言は文字どおりに受けとられる可能性も高いと言える。このことについては後述する。

ここまででは「断り」に先行する相手の申し出が要請である場合を見てきたが、先行する申し出は要請ばかりとは限らない。次の例は提案に対する断りとなっている。

- 5) 「でもヤナギはやめさせましょう。この際」  
「さて外池が何ていうかね。彼はみんなに平均的な態度をとるからね。村八分みたいなことはしないだろうね」〔注9〕

5) は大学内のあるサークルに属するひとりのメンバーが、不審な点のあるヤナギというメンバーの除名について、先輩メンバーに提案している場面であり、外池というのはこのサークルのリーダー格のメンバーの名である。ここで、提案を受けた先輩メンバーの発言は協調の原理の中の量の範疇の原則に明らかに違反しているが、やはり、即座に拒絶していないという点で、意見の不一致を最小限にせよという丁寧さの原理のうちの(V)合意の原則にはかかっているのである。この話し手は自分自身の意見として断るのではなく、サークルのリーダー格の学生が反対するだろうという発言をする。これは断るための理由としてかなり権威があり、断る正当性が高くなるので、「断っている」という含意が導かれやすい。聞き手にもこの意図は明らかに伝わることになる。

さらに例を見ていく。

- 6) 津野木の声に苦笑が混り、  
「ともかくおもしろい酒場がある。いま、そこで飲んでいるんだ。出てこないか」  
「どんな具合に、おもしろいんだ」  
億劫なので、私の声音に断わる気配が滲んだ。〔注10〕

6) でも先行する申し出は提案の一種だが、内容を考えれば勧誘ということになる。ここでの「私」の断り方は、2)と同様、質問の形式をとっている。質問の形式をとっているとはいえ、話し手はその質問に対する答えを本当に聞きたいわけではない。ここで2)と異なりむしろ4)と似ている点は、話し手には積極的に断るべき理由が何もないことである。「私」は、過去の経緯などもあって、相手である津野木という男と何とな



くあまり顔を合わせたくないような気がしているだけなのである。したがってこの例の「私」の場合、単に即座に直截に断る失礼を避けるために質問しているにすぎない。例文2)のようにその先に続く含意の見通しはなく、その場しのぎの逃げのようなものである。逃げ続けて相手があきらめるのを待つという(いささか卑怯とも言える)消極的の戦略に沿った発言ではあるが、「断る」という本質的に無礼な行為を直接には行わないですむという点では確かに丁寧であるとも言える。この戦略では意見の相違は起こりようがないのである。

### 3. 会話の含意とコミュニケーション

以上、要請や提案(場合によっては勧誘)の申し出に対して婉曲に断る例をいろいろと見てきた。ここで見てきた限りでは、要請か提案かという先行する申し出の違いによっては、対応する断り方にあまり意味のある違いは出てこないようである[注11]。これは、断りそのものよりも先行する申し出である要請と提案とが実質的にはあまり違いのないものであるということによると思われる。例えば、

(a) また明日会ってくれませんか

というのは要請であり

(b) また明日会いませんか

というのは提案ということになるが、その違いは、(a)は「～してくれる」という表現を含んでおり「その申し出に聞き手が応じることは聞き手から話し手が恩恵を受けることになるのだ」という話し手のへりくだりを示しているというその点のみである。セールスなどの場合を考えてみても要請と提案にそれほど差がないことはよくわかる。

(c) ○○新聞にお変えになりませんか

という勧誘(形の上では提案)は、実質上

(d) ○○新聞をとってくれませんか

という要請に近い。要請と提案というふたつのタイプの申し出は、例えば Searle の発話内行為の分類[注12]にしたがえば、ともに行為指示型(directive)であると言える。このように、先行する申し出が要請か提案かによっては断り方に有意な違いは生じないので、以下ではこれらをひとつのものとして扱っていくことにする。

ここまで見てきた「要請・提案」対「断り」の会話を整理してみると、次に示す会話型1と会話型2のように大きくふたつに分類できる〔注13〕。まず会話型1を見る。

会話型1：

A：Xしてくれませんか。（または、Xしてはどうですか。）

B：それがYなんですよ。（Yは断りの理由となるべきものごと）

この会話型1を具体化してモデル化すると図3)のようになる。このモデルは会話中の発言それぞれの含意の構造について円を用いて表している。最も内側にある円がその発言の話し手の真意であり、最も外側の円が発言として現実にあられた形式である。この両者の間にある円がその形式に付随すると考えられる含意である。外側の円ほど間接的な丁寧な発言になると言える。話し手の意図した含意の円の系列では、最終的な含意は真意に一致する。当然ながら話し手の意図と異なる含意（含意X）の蓋然性もあり、聞き手がそちらの含意系列に進むこともあり得る。図3)において、Aの形式に対してBの形式で応じた場合、Bの形式はAへの答えとして協調の原理（特に量の範疇）にはかかっていないが、直截に断らず意見の不一致を避けた点で丁寧さの原理にはかかっている。この形式から真意へと続く含意系列の最初のものである含意1は、Aへの答えとしては厳密には量の範疇の原則にも丁寧さの原理にもかかっていない。含意1からさらに含意される含意2はすなわちBの真意であり、これをAに対して直接答えることは、量の範疇の原則には完全にかかっているが丁寧さの原理は全く無視したことになる。このBの発言で注意すべきは、形式が明確に含意の理由となり得ている点である。

次に、Aの発言は同じでも、それへの対応が異なる会話型2が考えられる。

会話型2：

A：Xしてくれませんか。（または、Xしてはどうですか。）

C：いやちょっと考えさせて下さい。

これをモデル化したものが図4)である。今度はAの形式による要請に対しCの形式のように答えている。Cの発言がBの発言と異なる点は、含意の少なさと、形式が含意と因果関係をもっていないということである。このCの形式は真意である含意1と何ら明白な因果関係がないため、含意が不明瞭となり、聞き手が話し手の真意とは異なる含意系列である含意Xへと進む可能性が相対的に大きくなる。

会話型1と会話型2がこのような形式と含意をもつことの意味を考えてみる。会話型1のBが丁寧さの原理を重視するために直截的に断ることをせず「Yなんですよ」のよ

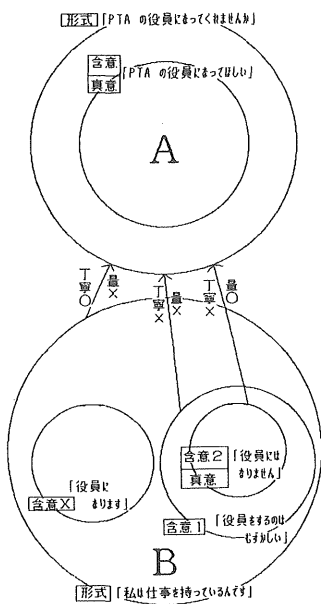


図3) 会話型1のモデル

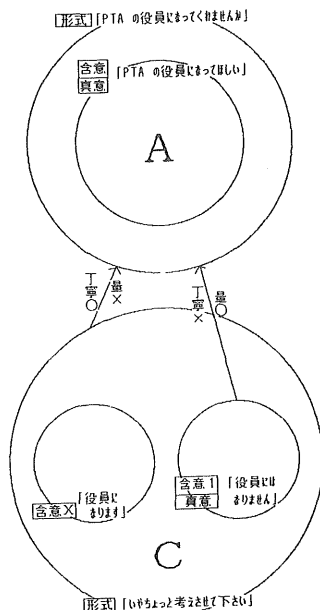


図4) 会話型2のモデル

うに答えたことは、その「断り」に理由づけを行い、相手の意に添うことは限りなく不可能に近いということをはっきり示してみせたということになる。この含意によって聞き手は自分の申し出が受け入れられることの不可能性を自ら悟り、(B自身は「断り」そのものは全く述べていないから)自主的に申し出をあきらめ引き下がる。申し出はなかったことになり、意見の相違ももちろんなかったことになる。したがって会話は申し出に対する断りという終結に達しながらも、かつ、このふたりの間には良好な人間関係が保たれるというわけである。一方、会話型2の方では、Cは確かに意見の不一致を避け丁寧さの原理を守ってはいるが、この「考えさせて下さい」という形式は理由づけとはならないので、聞き手はその含むところ、ひいては話し手の真意(と思われるもの)を推察しにくく、さらに申し出を重ねるべきかそれともあきらめて引き下がるべきか悩むことになる[注14]。そのためいずれにせよ会話の流れがぎくしゃくしたものになりやすい。つまり会話型2では理由づけがないため「断り」の話し手が自分の発言の目ざ

す方向を明示的にも暗示的にも示していないということになり、その分相手に判断の負担を与えるのである。そういう意味からすると、大したわけもなく相手の申し出を断ろうとするとき、仮に嘘でも会話型1のように何らかの理由づけをするのは、誠実ではないがコミュニケーションの流れの上からはより丁寧であると言えるかもしれない。

#### 4. おわりに

以上、語用論的な観点から、婉曲に断る表現について検討してきた。「断り」という行為において丁寧さと誠実さが両立しにくいというのは興味深い事実である。冒頭の部分で見た例文1)において、bの断りについてのcの発言内容はいわば儀礼的な丁寧さの重要性を指摘したものであり、それに続くaの発言は誠実さを評価したものであると言える。ついでに言えば、丁寧さを重んずるcの発言それ自体がbへの態度において率直ではあるが丁寧でなく、逆にaの最後の発言が率直というよりはbに対して気を遣ったものとなっている点は、皮肉なことだと言えよう。

語用論的な観点から言語事象を見ていく場合、要請や提案自体の表現はよくとり上げられることであるが、その後に続く断りの表現も興味深いものであり、これまで以上に研究を進めていく必要があると考えられる。本稿ではまだ表面的な検討に留まっていて論考の余地は多いが、これから機会をみてさらに深く掘り下げていきたい。

#### 【注】

- \* ) この小論は原稿の段階で筑波大学文芸・言語学系の高田誠先生にいろいろな御助言をいただいた。ここに記して心から感謝申し上げる。
- 1) 分析の本来のあり方からすれば、談話を対象とする場合でもひとまとまりの単位を決めるための何らかの客観的な基準を設定するべきであるが、筆者は現段階ではまだそういった明確な基準を設定するに至っていない。本稿では、とりあえず内省にしたがって、断りとそれに先立つ申し出とを含む場面の会話を原文テキストから随時部分的に切り取ることにする。
- 2) 三島由紀夫『仮面の告白』。
- 3) Grice(1975)。

- 4) Leech(1983)。なお同書の引用の日本語文は訳書による。
- 5) 田中康夫『なんとなく、クリスタル』。
- 6) Leech(1983)。
- 7) 吉行淳之介『暗室』。
- 8) Leech(1983)。
- 9) 島田雅彦『優しいサヨクのための嬉遊曲』。
- 10) 吉行淳之介『暗室』。
- 11) 森山(1990)は、要請や提案という形式ではなく、その内容が本質的に申し出る側の利益になるものであるか申し出を受ける側の利益になるものであるかという区別を考えた上で、そのうちの前者のみを扱っている。この区別における後者の場合は「結構です」や「いいです」の類の断り方ができないという特徴を持つ。本稿で扱った例も前者のみだが、後者についても別に考える必要がある。
- 12) Searle(1979)。
- 13) ザトラウスキー(1990)は勧誘の会話を総括的に分析した興味深いものである。そこでザトラウスキーは、問いなどに対してはそれに対する答えとなり得る応答こそが予想される「有標」の応答であり、答えそのものではなく答えの延期やその説明が応答となる場合は「有標」であるとした上で、無標の場合と異なりそういった有標の応答には遅れの要素や形式の複雑さなどの共通性が見られると述べている。本稿が扱っている「要請・提案／断り」の会話の場合には、断りの理由づけ(会話型1)や回答そのものの延期(会話型2)がその共通性であると言えよう。
- 14) 実際、森山(1990)では、自分が申し出を行ったとして相手から「考えておく」のように答えられたとすると、それが親しい相手であれば5割以上、親しくない相手であっても2割から3割程度には申し出が受け入れられる可能性があるとするというアンケートの集計結果が報告されている。

#### 【参考文献】

- Grice, H.P. (1975), *Logic and Conversation*, in Cole and Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol.3: *Speech Acts*, New York: Academic Press.
- Leech, Geoffrey N. (1980), *Explorations in Semantics and Pragmatics*, Amsterdam: John Benjamins. [内田種臣・木下裕昭訳(1986), 『意味論と語用論の現在』, 理想社.]
- (1983), *Principles of Pragmatics*, London: Longman. [池上嘉彦・河上誓作訳(1987), 『語用論』, 紀伊國屋書店.]
- 森山卓郎(1990), 「断り」の方略—対人関係調整とコミュニケーション, 『言語』19-8.
- 佐藤信夫(1981), 『レトリック認識』, 講談社.
- (1985), 『レトリックを少々』, 新潮社.
- ザトラウスキー, ポリー(1990), 日本語の勧誘の会話分析とストラテジー—英語の会話分析との対照研究—, 筑波大学文芸・言語研究科博士論文原稿
- Searle, J.R. (1979), *Expression and Meaning*, Cambridge: Cambridge University Press.

## Refusing: communication and implication

Mihoko Nomura

This paper discusses the expressions of refusal. Refusing some requests or proposals, usually we do not use direct words of refusal such as "No", "I don't want to do it", etc., but give indirect expression instead. This seems to indicate that an usual conversation has two aspects; first, in which participants exchange information one another, and second, in which participants try to keep good relations one another.

In this paper some examples of conversation are considered and the following two patterns of indirect refusal are found as a result. The first one is just to state some reasons why the speaker cannot accept the request or proposal. And the second one is to avoid making immediate reply and get through the situation with such words as "Please give me time to think about it", or "I'll answer later", for example. This paper attempts to analyze these two patterns from the viewpoint of implication.